

コロンボに着陸したのは現地時間の10時でした。萌にとって2日前まで午前1時だった時間です。空港に出迎えに来ていたハザマの運転手ティッサの姿を見ると「ティッサ！」と飛んで行って抱き付き、1年間名前も出なかった人と瞬時に打ち解け、もう1人の運転手ウガンダも萌の姿が見えると本当に嬉しそうにしてくれました。

私は健太の遺骨を背負い、なまなましく暑い空港の通路を歩くのがつらくななりませんでした。健太と共に歩く予定だった通路、健太と一緒に乗るはずだった飛行機は悲しく苦しいものでした。洋が東京の家で言いました、告別式の時は悲しかったけど、こんなに淋しくはなかった、と。

車で空港を後にする時、萌は大声で「バイバーイ！みんな！」と窓から叫びました。彼女はこの時点で日本のお友達とお別れをしたのです。

コロンボの古いお友達たちが、萌を前と同じように迎えてくれました。それでもやはり「もえ、さみしいよ」と言います。時には、弟を思い、時には南奥沢のお友達を思うらしく、「もえまだけっこんもしないのに・・」と切なそうに言います。昨日のお昼寝の時「健太くんが居なくて淋しいよー」と泣きました。「健太くんおおきくなれなかったね」「もえ、健太くんになにもしられなかったよ」と心優しい姉は泣くのでした。「もえ、しゅうじくんとけっこんしたい」「かずくん、もう五歳なんだよ」と時々思い出したように言います。

今朝も、Over Seas Children's School (OCS) へ向かう車の中で突然「かずくん、おうち、こわれちゃったそうだよ（？？）」と言い、私が「・・そうだよ」という言い回しがおかしくて笑うと、「笑ってんじゃ、ねーよー」と南奥沢の男の子から教わった言葉で照れました。

幼稚園は高校生まで収容する大きなインターナショナルで、萌はキンダーガーデンの部に通います。スリランカ人、白人、韓国人、日本のお友達も萌の他に二人居ます。時間は七時半から十二時まで、水筒とスナックを持って出かけます。

親友だった女の子が同じクラスに居るので、1日目からすっと溶け込んだようにみえました。

帰ってからは昼休みに戻る父親と三人でお昼を食べ、お昼寝をし、起きた後、また日本人のお友達の家へ母と出かけたり、呼んだりして早速一年前と同じ生活がスタートしそうです。
極寒の日本から来ると、今は暑くて暑くてしょうがない、という感じで、高い電気料金を気にしながらクーラーをかけて生活しています。

われらの老犬マルチーズのSECくんはすっかり老け込んで、狂喜乱舞するお出迎えを期待していたところが、何のことはない、玄関口からよろよろと出てきただけでした。
がっかりした勝手な飼い主は旅の疲労も手伝って「相変わらずバカな犬だよ、お前は！」などとつっけんどんに扱いましたが、翌日、私たちの不在中ずっとSECの様子を見に来てくれた友人がたずねてきて言うには、二週間前の様子と全然ちがう「元気ぶり」だそうで、彼女が私から健太の訃報を受け、気になってすぐにこの犬を見舞ってくれた時は「まりさんが帰ってくるまでモツかしら？」というほどの衰弱ぶりだったそうです。反省した飼い主は老犬を労わってやらなくては、と思っています。もう、ソファに飛び乗ることもできなければ、ベッドに上がるともせず、わざわざマットを重ねて寝台を高くする必要もなくなりました。嫉妬心は健在で、萌には強気の姿勢。到着のその日、萌は腕を引搔かれ、深傷を負いました。私が萌を抱いたりするのを見ると吠えて、足をかっかっと後ろに蹴って抗議します。

萌の方では、そんな仕打ちをされても「もえのセックう」と犬の後を追いかけ、帽子を被せたりリボンにつないだり、櫛でとかしたりして遊んでいます。

一年前、日本に帰り、奥沢幼稚園をスタートした時点では園に居た大きな子供好きの犬が萌の最初のお友達でした。「犬が萌ちゃんの救いみたいで」と訪問してくださった先生に言われ、母は涙ぐんだものです。

今また、萌は犬から再出発しようとしています。

「萌ボニーに咬まれる」の巻き

萌が馬に咬まれ、大騒ぎのシンハラ正月となりました。

4月12～14日はこちらの仏教のお正月で、使用人たちはみんな帰省し、学校も休み、邦人企業も閉まります。高原のホテルに友人2家族と行ってきました。ホテルに着いた日、夕方ちょっとプールで泳いだだけで、翌日の午前中にはもう、ホテルに飼われているボニーちゃんに太股を咬まれた萌、おかげで、キャンディという近くの町まで破傷風と狂犬病の予防接種を受けにホテルのマネージャー付きでかけずり回らなくてはならず、ただでさえ万事にのろいこの国のまじて正月時期のこと、日が暮れかかってからやっとホテルに帰りました。

はじめ、ホテルのあるお茶園の付属の診療所で手当を受けましたが、汚れた白衣を着たスリランカ人の男性が傷を指でとんとん触れるので、その度にマキュロンで消毒する母でした。結局大げさな絆創膏を貼られ、抗生剤を処方されただけで、一旦ホテルに帰りました。ボニーは毎月狂犬病の予防接種を受けているから「ノー、プロブレム」と言うマネージャーも「でも万一のことがあるといけないので予防接種して欲しい」とのこと、病院まで付いてくるという親切ぶり、さては先だてワニ園で子供がワニに咬まれ死んだ事故があったので、心配なんだろう、と親は皮肉な目で。マネージャーの熱心ぶりをながめています。

破傷風の方はすぐしてもらえたが、狂犬病の方は薬を手に入れるところと注射してくれるところが別々で苦労しました。

正月時期の閑散とした大病院の待合室で手続きを待っていると、小さな赤ん坊が母親に抱かれておっぱいを飲んでいます。自分の父親らしい人に付き添われた若い母親は必死で授乳しているのですが、赤ん坊は飲まない、と言うのです。多分2000グラム程、健太が生まれたてよりもまだ少ない位の肉の薄い赤ん坊で、その小さな足を見ると思わず触れてみて、萌はぱっとこぼれるように笑い、その顔につられて、若い母親も、付き添いの男性も同時に笑いました。萌も健太を思い出したのでしょう。何をあげても飲まないらしく、おしつこも出てないので心配して病院に来たということでした。どういう診断を受けたのか知りませんが、萌と同じくらいの年の男の子を連れて、さよなら、と手を振りながら心配そうな一家は帰って行きました。

随分待たされて、やっと2本めのお注射をすることになった萌はぎゃんぎゃん泣き、マネージャー、医師、父親の3人になんとか取り押さえられようとしたのですが、真っ黒な看護婦の高圧的な態度に怯え、なおもあはれ、私が注射針を手に萌に立ちはだかる看護婦の険しい顔を見てかっと頭にきて、彼女の肩につかみ掛かり、もっとやさしくできないの、こんな小さな子に、とわめき、まずいという雰囲気が場に流れる始める。萌の方はとたんに静かになり、やっと注射に甘んじたのでした。萌は赤ん坊のころから、母がヒステリーを起こすとその場をなんとか沈めようと努力をするけなげな子供なのです。

外線のつながらないホテルから移動電話を使い広尾の日赤にかけたり、在スリランカの大天使館にかけたり、とんだお正月でした。

負傷してホテルを出るときはぐったりと母の腕に抱かれていた萌も、帰りの車の中では運転手やマネージャーにちやほやされ前の席に乗せてもらい、マネージャーに買ってもらった二個めのアイスに口のまわりをベトベトにした顔でこちらを向くと「ねーおかあさん、あしたがっこうある?きず、みんなにみせていいでしょ」と嬉しそうに笑い、以来、会う人会う人に「ボニーに咬まれた」「ホース、バイト」などと言ってはスカートをめくって見せる困り者です。犬、猫のみならず息あるものすべてに興味を持ち、何事によらず警戒心がなく、興味を持つと一目散で走り寄り、手を差し伸べる萌は懲りた様子はなく、ただ狂犬病の注射の痛みだけは堪えたようです。

萌の健太を失った心の傷

は、また親の気持ちとは別なところにあるらしく、母親が不安な時、父親から聖書のある箇所を取り出して読んでもらっているのをまね、自分も人形相手にその「すべてのわざには時がある。生まるるに時があり、死ぬるに時があり、植えるに時があり、」という箇所を読んでやっている時のこと「けんたくんがしんだのは、もえのせいじゃありません、けんたくんがしんだのはかぜのばいきんのせいなのです。だからけんたくんがしんだのはもえのせいではないのです」と言っているのを聞いて、ぎょっとなりました。一体、いつから萌が弟の死を自分の責任と感じるようになったのか。そんな考えは私たちの頭をかすめたこともないので

す。そして、いつから「かぜのぱいきん」などをひねり出したのか。

そして、現実の生活の中で健太がまだ生きている、という空想をしてお話を作り、それが良いこととは思えなかったので叱りつけたことがあります。「おかーさん、ほらけんたくんがここにいるよ、おかーさんけんたくんのあしふんてるよ」などと言うのです。「萌、健太君は死んじゃったの、イエス様のところから萌やお母さんを見ててくれるんだよ」と言っても「そのけんたくんじゃなくて、もうひとりのけんたくん」と言うのです。「健太は一人しか居ないの！」と怒ると元気なく「わかったよ」。ぐっと顔をこわばらせて、お友達が来て「もえちゃん、もえちゃん」と話しかけられても「もえきょうちゅうしわるいから」と不機嫌な傷付いた顔のままでした。子供は空想の世界に癒される生き物で、そこを閉ざすようなことはしてはいけなかったと元園長の伊藤万里子さんから聞き、深く後悔しました。

アンナさんが突然やってきました。

その日は丁度、前々から予定してあった「コンサート」の日でした。バイオリンを始めた万希さんと一緒に一度位のペースで練習を積んできたので、一度、人前で引いてみようと英語の先生のインドラを囲んでコンサートを開きました。といつても6人のお茶会に演奏が付いたという程度のものです。でも私はちょっと、万希さんはけっこ一緊張して、気持ち良かった。やれやれ、と終わって万希さんと打ち上げのビールを飲んでいると電話がかかり、「アンナ、スピーキング」と言うのです。「アンナ・エダル？」と聞くと「イエス」イスタンブル時代、チエロの先生から紹介されてヨガのグループに入っていました。オーストリア、イスイスなどドイツ語圏の女性たちのグループで週に一度ビジムテペというクラブハウスに集まりヨガ、メディテーション、時々、お菓子を持ち寄ってジンジャーティーを飲んだりしていました。終わって、ビジムテペから帰る途中、暮れかかる日を反射したボスボラス海峡の光景は声をあげたくなるほど美しかったものです。アンナがリーダーで、当時はトルコのオーストリア高校で数学と哲学の教師をしていました。今はイスイスに居て、今年、コンサート活動のためにトルコからイスイスを訪れた貞子さんというフルート奏者の友人と出会い「眞理が今、スリランカに居るのよ、ああ貴女は眞理を知らなかったかしら・・」「知ってる、知ってる。ヨガを一緒にやっていたのよ」という話しになって、アンナさんはスリランカのアーユルヴェーダを体験しにイスイスからはるばるやって来ました。

7年間に手紙が1通来ただけの関係です。私の方はもうちょっと出していると思うけど、それにももう一度会えるとはお互いに思っていなかったのです。健太が死んでしまった時、海外に居る外国人の友達全員に健太のことを知ってほしい、と思ったことがあって、その時のこころづもりの中にアンナは混ざっていたけれど。

私の英語は大したことはないのですが、それでもヨガのPositive thinkingということに触れ、私はマイナーなことをポジティブに捉えろといわれても、そんなことはできない、と言うと、それは理解してないからなのだと、と言われ唸ってしまった。おばさんたちが、ものごとは考えよう、考え方次第で不幸も幸せになる、という台詞が私は大嫌い。そんなまやかしのご都合主義はものごとの本質をくもらせるゆゆしき態度だ、と思うのです。アンナは「何故なのか、と考えても答えは一つじゃない、いろいろな理由があって、それを完全に知ることは出来ない。ひとはすべてを知ることができないということが判れば、受け入れられるのだ」と。

私はアンナさんに「健太の命は8ヶ月だったけど、その一生は完全な一生だった」と言った時、その思いがけないことばに自分でも驚き、そして真実自分がそう思っているのだ、ということを知りました。日本語で日本人に向かっては言ってはいけない、そう言い切ることは許してもらえない、そんなことばでした。もし、誰かに同じように言ったとしても、判ってもらうために幾つもの但し書きが必要なような、そんな自分の正直に気持ちでした。

そして、最後の夜、アンナさんはアンナさんたちの考えによれば、モンゴロイドの子供たちには特別なエネルギーがあり、特別なスピリチュアを持っていて、私たちにエネルギーをあたえてくれる素晴らしいひとたちだ、と彼らは別なプラネットから来たのだ、とああ、マリ、なにも心配することはない、いつかひとは知るだろう、と。

自分の誕生日に突然やって来た日アンナ、そして帰って行ったのは4月28日、健太の生まれた日でした。アンナに言わせれば、それも、これも偶然ではない、なにか意味のあること、というふうになるのかも知れません。

<one day fast>をやりました。

1日水のみ、これなら出来る、と思って実行したのですが、実はその後4日間、果物から始まって、生野菜、煮た野菜、穀物、と徐々にプラスしていくなくてはならず、結構大変でした。断食は誰でも出来るけ

ど、食べ始めが重要でそこでぶつたおれる人が居る、と聞いていたので怖々でした。しかし、1日中、前の晩からだから、32時間ほど食物のことを思うことも、塩分もなにも身体に入れない、という経験は実際生まれて初めて、腎臓も肝臓も43年間1日も休まずに働いてきたので32時間くらいお休みをあげても良いわけです。不思議な気持ちでした。瞑想と言って良い心の状態、たリーっとコロニアルの風になびかれつつ1日を過ごしました。黄泉の国に行った息子にばかり想いが行き、ああ、供養というのにはこういうことをいうのか、と、断食が宗教的儀式としてあるのは、断食自体が持つ生き物人間に思い知らすなにかがあるのだ、と思いました。健太のことを恋しく思いながらも自分が行き続けていくことにリアルな解放された世界を感じるとでもいうのか・・。2日後、同様に決行した洋くん、きっと同じ心情にとらわれているのだろう、とそっとながめていたら「考えまい、考えまいとしてもドーナツが頭に浮かんで・・」とその即物的な健全な性格をあらわにし、両者の性質、体質の相違を浮き彫りにしてくれたのでした。あろうことか「おとーさんに一粒だけ頂戴」などといじましく萌のご飯をねらう夫とハイヒステリーを繰り返す妻、両親がなにをしているのかわけわからない娘、へんにべたべたしつこく可愛がる飼い主に戸惑う犬、突然お茶を飲まない、冷やした水は飲まない、ミントを大量に買いこんでミントティーを作れ、塩を入れない野菜だけのスープを作れ、と注文する女主人になーにやってんだろう、と首を傾げる女中さんがありました。お肌のつるつる、と2、3日頭が以上な冴え方をしたほか、二週間後にはすべて元どうり。

佐多美知子さんから絵本「さよならっていさせて」と河合隼雄の「ファンタジーを読む」が届きました。萌を心配して送ってくれたもので「死」を早々と体験してしまった子供のためのものです。目が洗われる思いがしました。萌がどんな反応を示すか、今その時を待っているところです。

セックは実はそのしつこい皮膚病がフィラリアの一種であることが判り、こちらの獣医の荒っぽい治療に一時は足どりを失い、家の階段を上ることも出来なくなりました。注射を毎日4本づつ左右の後ろ足に1週間も打たれ、誤った治療により死んでしまう動物の話をよく聞くのでとても心配しました。奥沢の、子犬の頃から診ていただいている獣医先生に電話したけど、この付近の風土病に関してはお手上げで、迷ったけど信用ならないタミル人の獣医にまかせて治療を続けることにしたのです。放置すると失明、毛も全身抜ける、と聞き、それも生き物にとってはつらいことだし。でも1ヶ月たった最近、前のように飛んで上ることはできないけど自力で階段を上り降りしているし、力も徐々に甦ってきています。治療の後遺症じゃないのか、とすっかり弱ってしまったセックを連れて行くと、お腹に虫がいるからだ、と（力が弱ったのはお腹の虫のせいと思うのか？と聞くとこちらの目を見ずにイエスとのことでした。）また注射しようとしたので、頭にきて、もう、これ以上は注射しないで、もう結構、って連れて帰ってきました。あとは自宅でわれわれ夫婦のラブ・ケアーしかいました。

* ケビン君の寄付金集めは合計で680775円となりました。結局ハザマからの497375円が大きく、大田区職が組織的取り組みを断ってきたので、100万円にはまだ満たない状況です。こちらの日本人の奥さんたちからは合計で11000ルピーですから22人ほどが協力してくれたことになります。しかし、手術の後遺症や、今後の成長に深刻に関わっていくホルモン剤のスリランカでの調達方法など解決しなくてはならない問題はまだまだあります。これから日本の教会関係者、区職の友人知人に向けて文書で呼びかけるつもりです。愛育病院の加部先生からさっそくE-MALEで返事が来たのを心強く思っています。

コロンボ通信第3号

コロンボの週明け

・・といつてももう、木曜日。

どん底気分の先週末、苦しまぎれに発信しまくったメールの返事が週明けに続々届き、有り難い！そしてやつといくらか晴れ間ののぞくコロンボで私は月曜からのスケジュールをこなしています。

月曜日の朝は夏休み前最後のヨガがあり、続々と休暇を故国で過ごすために帰ってしまったメンバーを除いて参加者は2人、始めてリーダーのキャシーさんと2人で終わったあとお茶をしました。英国人である彼女はスリランカに7年居て、その前はケニヤに居たそうです。子供たちは萌と同じ、OCSに通っています。

ヨガのあと10分でもメディテーションの時間を入れてほしい、と思っている私は、トルコに居たころ参加していたグループでは必ず、終わりの何分かは車座に座り、静かに手をつないで瞑想の時間を過ごしたことをアピールしました。そういう時はなんかふわーっとあたたかな、泣きたいような気持ちになった、と言いました。自分もかつてそういう経験をしたことがあるとキャシーさんは言いましたが、瞑想のリーダーにはあまり自信がないようで、ある時、瞑想の時間を持ったとき、1人の女性が泣きだし、自分は泣くことを邪魔しないようにしたけど、それ以来彼女は来なくなってしまった、ということでした。本当に残念だ、と。

そこで、感情を噴出させることは難しい、という話しになりました。洗練された、節度ある行動を取ることに縛られている、そして押しつぶしている感情を吹き出そうとするとともエネルギーが要る、と。ある種、整理整頓した棚をばらばらに乱し、また積み上げるという作業に似たものがあります。そして、そういう乱れを「恥」とする背景があって、だれもが「恥」を恐がっていると思います。

私は泣こう、と決めた時、カセット（同じく子供を亡くした友がこちらに来る時くれた贊美歌集）を聴き、泣くことにしています。そうして意識的にあれ吹き出しておかないと気持ちが変に捻れるようで怖いのです。

マチアスの母であるミングリーは台湾の女性ですが、20年以上ドイツに居て、ご主人はドイツ人、マチアスにはハンディキャップがあり、私は健太が生まれたとき、すぐに少しでも普通と違う子を産んだ女全員のことを考えたけど彼女もそのうちの1人、ここに帰ってきて始めて彼女を訪ねた時、泣かなくちゃ駄目、と言われました。今泣かないと、3年、4年後につらくなる、と。

先週末にメールともだちのかつてコロンボ在住のはらまま（彼女も勤務先のガンセンターでケビン君のカンパ活動をよびかけ権威の壁にぶつかり怒っていたひとです。）から届いた返事には、彼女がつらかった時期職場で開かれたホームコンサートで、わあわあ泣いてしまった話しが書かれてありました。彼女の聴いた音楽には、そして、その時居たひとたちとの時間には、瞑想に通じる癒しの役割があったんですね。

今日、ベートーベンの悲愴は先生に褒められました。次はショパンのプレリュードです。私はベートーベンが好きです。

シリアルスな緊張とあたたかい緩みの合間のあの壮絶なヒューマニズムにはこころも指もしひれます。

私がピアノを決定的にやめよう、と思ったのには様々な原因があって、それはその当時子供だった自分にはどうすることも出来ないものだった、と思います。別にその事に挫折感をもっているわけではないのですが。コンプレックスにはなっているかもしれません。

私の母は上野の育ちで、彼女の実家の桜木というところにはかの芸大があります。母は小

さい頃からピアノを習っていて、芸大を受験しましたが、落第、失意落胆し、次期の受験に備えたのですが、体調を崩し「結核」の診断を受けます。当時は不治の病です。それで全てギブアップして、水彩画など習ったようですが、そちらもあまりぱっとしなかったようで、しかも後年になって「結核」が誤診であったことが判明したりして、娘の私に対するピアノのしごきは自分自身の破れた青春がかかっていたのでしょうか、残念ながら私は彼女のしごきに精神的に付いて行けず、期待に応えてあげることができませんでした。

彼女の死後、何年かたって、近所の子供たちと、可愛くて賢いと近所ではちょっと有名だった煙草屋の娘さんがやっていた教室に通いはじめ、それより個人の先生が良い、と数人と個人のレッスンを始めました。下地があるので進みは格段に早かったのですが、幼児期にインプットされた「わたしはダメだ」という想いはいつまでも、だれにほめられようと消えなかつたように思います。結局その子供相手にピアノを教える先生に中学生の頃まで習っていました。

その先生の発表会のある日。私は最年長で小さな子供たちに混ざっていました。会場にはわれわれの次に会場を使う別なグループがあり、リハーサルをしていました。

厚いカーテンの隙間から覗くと、学生服を着た男の子がピアノを弾いていました。当時、ピアノのお稽古というと女の子の芸事のような雰囲気があり、男の子が習うのはもっと本格的に音大を目指すなど、特殊な場合だったような気がします。

私とそう年の違わない男の子が、グランドピアノに向かって難しそうな曲をリハーサルする光景は自分から遠い世界に見えました。

私もセーラー服を着るようになっていましたが、ピアノのレベルは小さい子に混じって週1度若い女の先生に習う程度のもので、グランドピアノを前に全楽章を奏でる男の子のレベルとは違います。ああ、自分にはとても無理だ、と思いました。

先生のところでは「まりちゃんは上手」でも、一般的な水準からみれば「こどものお稽古」のレベルです。ああ、自分にはとても無理だ、と思いました。以来、私のピアノはさまざまな変遷をたどることになります。

そして、その子の弾いていた曲が「悲愴」なのです。

今の私に弾くことが出来るのだから、当時だって弾けた筈なので、あのプレッシャーはどこから来たものなのかな、と考えます。

アイリーン先生はたいていほめてくれます。解釈がとても良い、と言われるととても嬉しい。

「ロングバケーション」というキムタク君のビデオをミーハーの友達から借りて実は萌が寝た後、洋君とはまっている。白いシャツを着た、ピアニスト目指すキムタクがなんとなく遠い日の遠いメロディーのようで、ピアノにまつわる様々な光景を思い出したりしています。

月曜の夜は、ブリティッシュカウンシルでピアノコンサートがありました。英語の先生のインドラおばさんと行ってきました。ラフマニノフの校正前の難解な曲には参りましたが、アン・ドライバー（1897-1985）というイギリスの作曲家の曲は素晴らしい。母親がユダヤ人、伯母が神学者という彼女の曲はキリスト教の影響が強く、とても敬虔な気持ちになりました。コンサート会場はカウンシル内の小さなホールで来た人々はサリーを来た年配の女性が多かったけど、白人も何人か居ました。私たちは並んで席を取りましたが、お決まりの「予約席」には大柄な白人カップルと脇にいたお付きの白人男性はおそらくブリティッシュカウンシルの部長でしょう。

日本をはじめ、こういう国に公費で雇われる白人のタイプと文化施設特有のいかがわしい空気にひさしぶりに触れました。

では、また

次期の萌の担任が大柄で冷たく、こちらが理解しようとしないと、勝手に英語をまくしたてる（あたりまえだイギリス人なんだから。）女性で、萌のクラスメートの母親でもあります。私たちと合っても目を恐るべき早さでそらせるその人は娘の自閉的な感じからみても決して良い先生とは思えず、まして英語を操れず、白人のおともだちに壁を感じている萌やあいりにとて。インターはそういう点ではオープンと聞いているから学校に担任の先生を変更したい旨申しあげています。

ヨガのインストラクターでありイギリス人コミュニティの一員でもあるキャシーさんと私の会話です。ぎりぎりまで本音を言わないところなど日本人のおばさんと同じ。これが国外コミュニティに暮らすものの知恵なのか。

* キャシーの反応は以下のとおり

「ねえ、キャシーミセスホートンって知ってる？」
「ええ、どうして？次の先生彼女なの？」
「そうなの、良い先生？」
「良いんじゃない。良い先生だと思うわよ（！！）どうして？」
「変えて欲しい、とショーン（副校長）に申し入れたの」
「ショーンはなんて言って？」
「即答は出来ないそうよ、どうなるかしら」
「ミセスホートンも来たばかりの頃はいろいろと問題があったみたいたね、でも今はだいぶ変わったらしいわよ」
「そうかしら、そうは見えないけど。笑わないし、怖い、きびしい顔ばかりして」
「彼女を良い先生だ、とほめる人も居るわよ」
「それはネイティブの英語を話すという理由でしょ。英語なんて大したもんだいじゃないと思う、小さい子供にとて」
「そうね。変えてくれるでしょう、きっと。私たちも変えてもらったことあるから」
「えっ」
「そうなの。何人かで。」
「どうして？」
「だから、同じ理由」
「あのねー」

みたいな感じかな和訳するとね。

10,7 1997

セックが死んじゃったよ
レモンの木の下に埋めた
何か目印になるもの
と
言われたけど
なにも要らないと言いました

セックの生きてきた道はわたしたち 2人の道です
健太が死んでから
わたしには
健太の魂がセックの中にあるような気がしていた愛犬チャーン
とよぶとき
愛健チャーンと呼んでいた

でも
今はレモンの木の下
土に溶ける

急に死んじゃった

焼かないでいいのは助かるな
と思う

なんと多くの死

カウンセラーに何故、萌に対して犬の死を隠そうとするのか、私は自分自身の中でなにかを隠そうとしているのではないか、と言われました。健太の死、祖母の死、セックの死、なんと多くの死。でも子供にとって死は単純なものだし、死とはそもそも単純なものだ、と。犬は年を取り、病気になり、苦しみ、耐えられなくなって死に看取られた、ということ。自然な単純なことだ、と。

萌に話した。
もえちゃん、きょうおかーさんせっちゃんの病院に行って来た（これは嘘）んだけど、セックはやっぱりとても具合が悪くて、死んじゃったの

えーっ、セック死んじゃったの一、やだよおー、大声でセック！セック！と泣きました。わあわあ泣いて、じゃー新しい犬買ってよー、と言うかと思えば、セックの名を呼んでぼろぼろ泣き、セックは12才で犬の年でいえばすごく年を取っていること、病気になったり怪我をしたり年を取ったりすると生き物は死ぬのだ、と苦しみが楽になるために、おかーさん、じゃー新しい犬買ってよ、というのには、日本かどこかにずっと居ることになったら買ってあげる、と約束しました。スリランカと日本に国は気候が違うから犬は大変なんだよ、と説明するとすぐに納得しました。

健太も死んじゃうし、セックも死んじゃうしやだよー泣くので、ふと萌が健太とセックを早く会わせたいと言っていたのを思い出し、健太くんもセックに会いたかったし
セックも健太に会いたかったんだよ、と言いました。今頃イエスさまのところで2人で会ってるよ、と言いながらそういう空想は私の気持ちをとても癒してくれました。健太くんは萌のせいで死んだし、と再びそのフレーズが出たので、
萌ちゃんひとはだれかのせいで死んだりしないんだよ。かみさましか知らないことで、かみさまのおつもりがあるの、かみさまに失礼だからそんなことは思ってはだめだよ。と言いました。
萌は納得したように見えました。

明日おとうさんにお墓をつくってもらおう。

萌は家に着いてもしばらく車の中で泣き、家に入ってからもしばらく中に入らずに泣いていました。

萌は早く眠りました。カウンセラーが言うように、犬の死の説明が、彼女が弟の死を受け入れる学習になってくれれば良いと思います。

昨日は萌には内緒だよ、病院にいることにしておいて、と頼んだのに、今日はすべてを話し、泣いている萌を見て、ニヤーナ（新しい女中さん。香港帰り）はどうしてあいりの居る時に言わないんだ、そうすれば遊びに夢中で平気だったのに、帰ってから言うなんてマダムの落ち度だ、と食欲を失った萌を見て言うのですが、わたしたちは受け入れなくてはならないのよ、と私は答え、しかし全然納得してないニヤーナでした。

バーバラおばさんは何匹も犬や猫を飼っている評判の動物好きで、きっと何か教えてくれる、とマニラに発つ最後の日に訪ねてきてくれたキャシーが電話番号を教えてくれました。「私があまり成功はしていないのよ。故郷から連れてきたジャーマンシャーバードは今でもたくさんの薬に殺されたと思ってるわ。だから私は自分の犬が病気にならないようにお祈りするだけ。そして決してローカル以外の犬は飼わないの。でも最近良い獣医の話を聞いたわ、ちょっと待って」

彼女から聞いた、2人のジェントルマンが良いと言った、という女性の獣医は

バンバラビティヤのロウリスロードにあって、ゴールロード沿いを走ると必ず目立つがちゃがちゃした一角を入っていくとそこは始めて目にするコロンボ市が広がっていました。

きらびやかなサリーやトリンプの下着などを売る店、三輪タクシーが並ぶ通りを行くと獣医の看板が見えました。セックを抱いて門をくぐり薬品のケースや注射器のごみが黒いビニール袋に入れられて無造作に置かれた通路を入って行くと、診療している家の前にすでに洋君が待っていて、軒下に出された二つの籐椅子には制服の女の子と大柄な調子の良さそうな中年の男の人が座っていて、男の人は私に椅子を変わろうとしましたが、私は断りました。女の子の足下には大きなシェパードが寝そべっていて、籠に入った猫も居ました。蚊と蝶が私の足を刺し、踏み石がばらばらに置かれた狭い通路に日を避けてたつてると密集した家の子供の声が壙越しにそのまま聞こえてきて、見上げると赤いかわら屋根がこちらに落ちそうにひしゃげています。子供に呼びかける女の声、通路に雑然と生え伸びている草草、強い日差し、きりっとした眉のきれいな女学生は足はサンダル履きで時折じっと私を見ます。私はセックをバスタオルにくるんで抱き赤ん坊のように揺すっていました。

随分待たされて、私が戸を開け、どれほど待たなくてはならないのか、辛抱強い夫に替わって聞き、中で待つよう言われました。巨大な犬が台の上に白目をむいて寝ています。死んでいるみたい、と言うと洋はちがうだろ、と言い、でも全然動かない、と言って外の女の子に聞くと、それは彼女のではなく中年の男の人の犬でした。携帯電話を持って半ズボンをはいた彼と同室になってあなたの犬と聞くと、イエスと答え、死んだ、とても重い病気で、と言い、幾重にもバリアーの張った瞳の奥が涙でくもりそうになりました。死んだ巨大な犬の横たわる診療室に毛をほとんど失ってしまったセックをだいて待っていると、掃除に雇われている女の人の使う塩素系消毒剤の臭気に目がまわりそうになりました。

自分たちの番になって、これまでやってきた治療と今朝から食べなくなったということを説明しました。

若い女性の獣医はこころなし作り声でセックに語りかけセックは台の上でじりじりと後ずさりしました。体温を二回計り、口の中と目の裏を見て、酸素が少なくなっているので、もう一度血液検査をすることを勧められ、結局皮膚病の治療は今までどうり、治療とセックが弱ってしまったことに関連はない、と言われ、そんな訳ないと思っている私は何も進展のない状態で帰ることになりそうだ、と思いました。私はむかむかしてきたのでセックを洋にまかせてティッサの運転する車に帰り、エアコンをかけてもらって路上に駐車した車の中から、通りを通りをながめました。

女のひとが1人で随分たくさん歩いているのだな、と思いました。白人女性も居ます。グラマラスな金持ちそうなタミル人は胸を揺するように歩いて行き、そのモダンなサングラスと袖無しのゴージャスなブラウス。そんな階級の人が何の目的で自分の足でどこへ歩いて行くのでしょうか。東洋人の血が混じっているのではないかと思われるようなサリーを着たおばあさんは赤い数珠のピアスを付け黒縁の眼鏡をかけてまっすぐに歩いていきます。鼻に金のピアスをした女性を見て、麻子の事を思い出しました。パリでもちょっとスキャンダラスな鼻ピアス。えっちゃん（麻子の母）はスリランカじゃみんなしてるんやろ、と言ったけどここでも結構めずらしい。

私は私の知らない世界を車の中からながめしていました。

時間がかかるな、でもきょうに限って何故自分はこんな冷めた気持ちで待っていられるのかとふと思つたりしました。

洋が走ってきて、セックちゃんが突然けいれんを起こした、と言った時、いやだ洋くん、と私は一瞬逃げたい気持ちになり、そしてしばらく身体を折り曲げて気持ちを鎮めると、セックに向かって走りました。

セックは先ほどの台の上で女医に心臓の蘇生マッサージを受けていました。

やめてください、と言い、私が「セック」と名前を呼んで身体をなでるとまた心臓が動いて、かっと歯をむき、きゅうっと息が止まりました。注射をしようとしたので、何の役にも立たないからやめてと言いました。

私はモノとなってしまったセックの身体を来た時に包んできたタオルに包んで抱きあげました。それは少し勇気の要ることでした。毛を失った死んだ犬の体はもうセックではないようでした。さっきから私を気にし

ている掃除の女の人が扉に立っているので、戸を開けていただけますか、と言うと彼女はオーケイと言い開けてくれました。

コロンボのその日は暑く、風がありました。

家に着くと、すぐに埋めた方が良いだろう、と思いました。病気を持っていたし、この熱気ではなくさま変化が起こるだろう、そして私は萌に見せたくなかったのです。

神の選ばれた時は、常にその時にかなって美しいのでしょうか。

神がその日、12年半も生かして下さったセックを召されたからには、きっとその訳があるのでしょうか。

なんと多くの死

この4日、ジュリアおばさんも死んでしまった。私が彼女をバララットのナーシングホームに訪ねた時、彼女は103才と6ヶ月でした。眠っていて、ロレッタのお父さんのこと、お母さんのこと、気が付かなかつたけど、私は訪ねることが出来て幸せでした。

高齢でコミュニケーションの取れなくなった肉親の耳元で彼女の名を呼び続けるビルの姿は私が祖母に見せたものとは違いました。父や叔父が祖母を千葉に見舞った毎に見せる、恥がそこにはなく、するべきことをしている身内の姿があるだけでした。私についても、私を襲ったあの複雑な想い、悲しみとさまざまなしがらみ、労を出し惜しむいやな気分、責めを負うような否定的な気分、その気分は千葉を後にしてもなかなか消えてくれなかつたし、いつまでも引きずっとでした。

人間が弱い、ということなのでしょうか。

ビルとジュリアには血のつながりがありません。早く母親を失ったビルと兄弟姉妹は父方の兄の奥さんであるジュリアおばさんに育てられました。

わたしは健太というダウン症の子を授かるより以前からロレッタのお父さん、ビルの従兄弟がダウン症であることを知っていました。そしてビルが心からこの従兄弟ジョンを愛していることも聞いていました。

今回バララットのロレッタ家を訪ね、ロレッタのお母さんのフィルはジョンの写真を見せてくれました。

ジョンは56才まで生きました。そしてその母のジュリアは103才と6ヶ月なのよ、とフィルは自慢そうに私に言いました。

ジュリアは死ぬまでジョンに先天性の障害があったことを認めませんでした。

ジュリアがどんな風にジョンを産み、育てたのか、ロレッタ、少しづつ聞き出して、2人で本を作ろうよ、と私は提案しました。

ジュリアは自分の子供の障害をビルの妹のせいにしました。赤ん坊のジョンを彼女が壁に向かって投げたので、知能に障害を持った、と周囲に説明したそうです。

ジュリアに対し、ビルの想いは相当に複雑なはずなのに、彼の年老いた伯母を見舞う姿の中にはなんの屈託もありません。

「ジュリア！ ジュリア！ 機嫌はどうですか、ビルですよ、おばさん、わかりますか、ジュリア！ ジュリア！」と顔を紅潮せて眠る老人の耳元に呼び続けるビルを見て、フィルが悲しいでしょ、と言ったけど。そんなことはない、日本のナーシングホームをあなたは知らない、と言いました。

病院特有の臭いがない、というのが驚きでした。明るく、広く、清潔です。ジュリアおばさんのベッドの足下にはウォーキングシューズが置かれてありました。歩行の練習をなおもしていたのでしょうか。

ロイヤルチルドレンズホスピタル（RCH）にもあの臭いがありませんでした。あの臭いと臭いにまつわる病院の権威がなかったのです。医師は心を割り、いつでも個人的な相談に乗り、個人的に対応するのです。個人は駄目と寄付を断ってきたどこかの慈善団体とは違います。

わたしたちは何を恐れ、個人的な接触に怯えを持ち、コミュニケーションの難しくなった年寄りを無視してしまうのでしょうか。

メルボルン

萌とメルボルンに着いたのは現地時間の午前5時。カンタスの中は居心地が良く、スリランカの白人に辟易している私は機内に乗り込んですぐちょっとどきどぎしたけど、みんな田舎っぽく親切な人ばかり。萌は眠ってしまい、となりのおばさんの膝にまで足を乗せていたけど、「ファイン」と言ってくれました。

荷物を待ってからごろごろを押して出ていくと扉の外で待っていたロレッタが「マリ！」と力弱く呼び、私は彼女の状態が電話で聞いていたほど良くないことを知りました。

バララットは1時間半か2時間と聞いていたけど、それはなんの遮るもののない道路をまっすぐに走って、ということで実は144キロもはなれていたのです。まず手押し車を押して空港専用の駐車場へ行きロレッタの車を探す途中で私は寒さで歯が噛み合わなくなりました。オデールで買った綿入りのコートを着ていたけど、明け方のメルボルンはコロンボに慣れ、毛穴が広がりっぱなしの体にはこたえました。車の中に毛布を用意してきましたがエンジンをかけてハンドルを握る前に両手をこすり合わせるロレッタを見てしみじみここは冬なんだ、と理解しました。

途中、アメリカ映画に登場するようなグロサリーストアでコーヒーを買って飲み、トイレへ行きたくなかった私のために湖沿いの公園のトイレに寄ってくれました。そんな公衆トイレですら全く清潔で、ただパンツをおろすと凍えそうでした。

ロレッタの家に着くとそこは牧場で、彼女の両親と農場を継ぐ長兄が出戻りのロレッタと優子とリリーと住んでいるのです。私たちが着いた時は優子とリリーは学校へ行っていて、家にはフィルしか居ませんでした。ロレッタが荷物を全部持ってくれて、私は眠ってしまった萌を抱いて中に入ると台所に立っていたフィルが「来たのね」と振り返り、萌が眠っているのに気づいてあら、と口に手をあて起こしてしまった大変とそっと笑い近づいてくると私の頬にキスしました。

ロレッタの農場の家で過ごした一週間は禅寺で過ごすのにも似て規律正しく、ブルックリンのスザンのアパートでさしちゃんと3人で過ごした感じにも通じるものがありました。

午睡から目が覚めると日が傾きかけていて、日差しのあふれる居間から壮大な平原と羊の群れが見えます。優子が静かに遊び、台所ではフィルが片づけものをし、毛玉のような子猫が日溜まりに寝こんでいます。スリランカの熱気と高い湿度から飛んできた私は瞬時に真冬のオーストラリアの大平原の真ん中に居ました。

10月8日水曜日 古川家に訪れた別れ

予約を取った獣医はバンバラピティヤのロウリスロードにあって、ゴールロード沿いを走ると必ず目立つがちやがちやした一角を入っていくとそこは始めて目にするコロンボの別の顔が広がっていました。きらびやかなサリーやトリンプの下着などを売る店、三輪タクシーが並ぶ通りを行くと獣医の看板が見えました。セックを抱いて門をくぐり薬品のケースや注射器のごみが黒いビニール袋に入れられて無造作に置かれた通路を入って行くと、診療している家の前にすでに洋君が待っていて、軒下に出された二つの籐椅子には制服の女の子と大柄な調子の良さそうな中年の男の人が座っていて、男の人は私に椅子を変わらうとしましたが、私は断りました。女の子の足下には大きなシェパードが寝そべっていて、籠に入った猫も居ました。蚊と蝶が私の足を刺し、踏み石がばらばらに置かれた狭い通路に日を避けてたつてはいると密集した家の子供の声が辯越しにそのまま聞こえてきて、見上げると赤いかわら屋根がこちらに落ちそうにひしゃげています。子供に呼びかける女の声、通路に雑然と生え伸びている草草、強い日差し、きりっとした眉のきれいな女学生は足はサンダル履きで時折じっと私を見ます。私はセックをバスタオルにくるんで抱き赤ん坊のように揺すっていました。

随分待たされて、私が戸を開け、どれほど待たなくてはならないのか、辛抱強い夫に替わって聞き、中で待つよう言われました。巨大な犬が台の上に白目をむいて寝ています。死んでいるみたい、と言うと洋はちがうだろ、と言い、でも全然動かない、と言って外の女の子に聞くと、それは彼女のではなく中年の男の人の犬でした。携帯電話を持って半ズボンをはいた彼と同室になってあなたの犬と聞くと、イエスと答え、死んだ、とても重い病気で、と言い、幾重にもバリアーの張った瞳の奥が涙でくもりそうになりました。死んだ巨大な犬の横たわる診療室に毛をほとんど失ってしまったセックをだいて待っていると、掃除に雇われている女の人の使う塩素系消毒剤の臭気に目がまわりそうになりました。

自分たちの番になって、これまでやってきた治療と今朝から食べなくなつたということを説明しました。若い女性の獣医はこころなし作り声でセックに語りかけセックは台の上でじりじりと後ずさりしました。体温を二回計り、口の中と目の裏を見て、酸素が少なくなつてはいるので、もう一度血液検査をすることを勧められ、結局皮膚病の治療は今までどうり、治療とセックが弱つてしまつたことに関連はない、と言われ、そんな訳ないとと思っている私は何も進展のない状態で帰ることになりそうだ、と思いました。私はむかむかしてきたのでセックを洋にまかせてティッサの運転する車に帰り、エアコンをかけてもらって路上に駐車した車の中から、通りを通るひとびとをながめしていました。

女のひとが1人で随分たくさん歩いているのだな、と思いました。白人女性も居ます。グラマラスな金持ちそうなタミル人は胸を揺するようにして歩いて行き、そのモダンなサングラスと袖無しのゴージャスなブラウス。そんな階級の人が何の目的で自分の足でどこへ歩いて行くのでしょうか。東洋人の血が混じっているのではないかと思われるようなサリーを着たおばあさんは赤い数珠のピアスを付け黒縁の眼鏡をかけてまっぐらに歩いています。鼻に金のピアスをした女性を見て、麻子の事を思い出しました。パリでもちょっとスキヤンダラスな鼻ピアス。えっちゃん（麻子の母）はスリランカじゃみんなしてるんやろ、と言ったけどここでも結構めずらしい。

私は私の知らない世界を車の中からながめしていました。時間がかかるな、でもきょうに限って何故自分はこんな冷めた気持ちで待つてはられるのかとふと思つたりしました。

洋が走ってきて、セックちゃんが突然けいれんを起こした、と言つた時、いやだ洋くん、と私は一瞬逃げたい気持ちになり、そしてしばらく身体を折り曲げて気持ちを鎮めると、セックに向かって走りました。

セックは先ほどの台の上で女医に心臓の蘇生マッサージを受けていました。

やめてください、と言い、私が「セック」と名前を呼んで身体をなでるとまた心臓が動いて、かつと歯をむき、きゅうっと息が止まりました。注射をしようとしたので、何の役にも立たないからやめてと言いました。

私はモノとなつてしまつたセックの身体を来た時に包んできたタオルに包んで抱きあげました。それは少し勇気の要ることでした。毛を失つた死んだ犬の体はもうセックではないようでした。さっきから私を気にしている掃除の女の人が扉に立つてはいるので、戸を開けていただけますか、と言うと彼女はオーケイと言い開けてくれました。

コロンボのその日は暑く、風がありました。

家に着くと、すぐに埋めた方が良いだろう、と思いました。私はこのユスファリの家の檸檬の木の下に埋めることにしました。ティッサと洋が穴を掘り、ニャーナが見守りました。

* 同じ水曜日の同じ時間、佐藤家に展開していたお話し会の様子をノートで読ませていただき、私たち夫婦の通過した時間、同じ時、セックに与えられた試練と死をノートに載せて欲しい、と思いました。

眞理